



宮城県南三陸町から避難した子どもが通う宮城県登米市の小学校の校庭で、つなげた布を広げた。昨年8月、斎藤雅志さん撮影

布に希望の絵 60メートル

震災の被災地と世界をつなげようと、神戸大のロニー・アレキサンダー教授(平和学)が長い布を手に世界を巡る旅を続けている。宮城や岩手の避難所を皮切りに「何でも好きなものを描いて」と呼びかけると、失ったものの、希望を託すもの……それぞれの思いが60メートルの長さに連なった。

被災した人にもそうでない人にも同じ布に描いてもらおうと思ったのは、心の溝をなくしたいと思ったから。阪神大震災を神戸で経験。「うちは被害が小さかったから」と口をつぐむ人を見てきた。1年たつと、次の一歩が踏み出せない人に「いつまで被災者づらしてんねん」と言う人も出てきた。「本当は皆それぞれに悲しみを抱えていた。双方向で対話する場があれば、それを吐き出し、誰かが自分を思っていると確認もできるはず」

被災地・世界…神大教授巡る旅

17日に神戸で震災の追悼行事に集う人に描いてもらった。22日まで神戸市役所の2階市民ギャラリーに展示する。

「阿久沢悦子」

にいった人も、きつとボーボキを手がかりに希望を見い出せる」

昨春、仙台市の避難所でその布を広げた。高校生の女の子が4匹の猫を描いた。「津波でいなくなっちゃったけど、絵に描けば再会できる」。

小学生の女の子は女性の笑顔を2つ描き、一つに×印をつけた。「地震の後、大好きな先生と会えなくなつた」

8月、岩手県では男の子が変身ヒーローを描いた。「弱いけど一緒に戦ってくれるの」。その後、布は4カ国、6都市へ。チェコの子はクリスマスツリーの下にたくさん箱を描いた。「被災した人が一番欲しいものが中に入っているの」。ロニーさんは、布が被災者という枠から出て行く小さな道になればと願う。